

初夏、筍に舌鼓…

佐伯 仁



初夏、甦る力の象徴

5月。夏近し。樹々の若葉は緑。光が眩しい。土の中では筍が芽を吹く。新芽の十日間（旬）を筍と名づけ、後は竹と呼ぶ。

古代中国では竹の芽＝筍は「生薬」、精力剤とし珍重された。また我が国では稗の空間を神聖視し、逞しい成長力を畏怖して生まれたのが、平安初期の「竹取物語」。さらに竹のしなやかな弾力は竹細工に重宝。生活用具や民芸品など身近な素材として親しんだ。同じ竹でも中世には華道や茶道に取り入れられ、わび・さびの美意識に曲線の美も創造。

江戸期、“美”を追う心は“食”へ向けられ、筍の人気は高く、竹藪には盗人が出没。江戸川柳には“親竹は子を盗ませぬ垣となる”とあり、ここには盗人に手を焼く様子が窺える。また浮世絵には、竹藪で掘りたての筍を大事そうに小脇に抱えた着物姿の美女たちを絵師・豊国が華麗に写している。

気になるのは食用に適した孟宗竹の発祥の地。それは京都・長岡、乙訓地区の寂照院、境内に「日本孟宗竹発祥の地」の碑がみられる。鎌倉期、僧・道元が中国から帰国した際、この地に移植したという。

筍の誕生伝を

掘り起こす 森 澄雄

